汽水域研究センター活動報告

活動日誌

2000年(平成12年)

3月　『LAGUNA(汽水域研究)』第7号発行.

4月1日　高安克已教授が汽水域研究センター長に就任.(News Letter №12に記事)

6月30日　第39回汽水域研究懇談会

東京大学大学院工学研究科・作野祐司氏が「リモートセンシングの最前線」と題して話題提供. 参加者18名(内学外者4名).

7月21日　第40回汽水域研究懇談会

千葉大学大学院自然科学研究科助教授・土谷岳令氏が「水生植物の換気機能—植物体内を吹く風と生態系物質循環—」と題して話題提供. 参加者16名(内学外者4名).

8月10日　第41回汽水域研究懇談会

防衛大学校土木工学教室助教授・林建二郎氏, ㈱ミック・木村保夫氏が「植生護岸の形成とその効果」と題して話題提供. 参加者18名(内学外者10名).

9月　News Letter №12発行(本号からニュースを電子化).

10月　鳥取県西部地震(6日発生)の影響を八束町江島および周辺地域で調査.

10月13日　第42回汽水域研究懇談会

国立環境研究所生物圏環境部・矢部　徹氏が「干潟生態系の機能評価と分類に関する試み」と題し話題提供. 参加者19名(内学外者6名).

11月22日, 25日, 29日, 12月2日, 6日　公開講座『飯梨川流域の自然と歴史』を能義郡広瀬町(広瀬町中央公民館にて)において実施. 高安克已セ

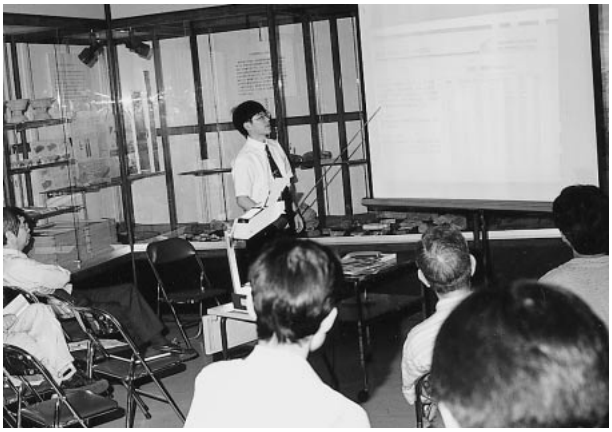

写真1. 第39回懇談会で話題提供する作野祐司氏(2000年6月30日).

写真3. 第42回懇談会で話題提供する矢部　徹氏(2000年10月13日).

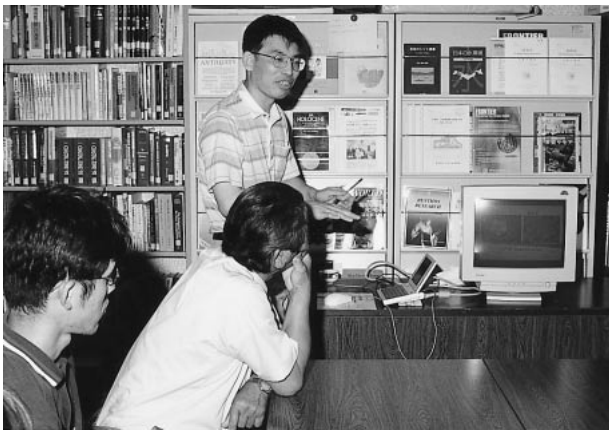

写真2. 第40回懇談会で話題提供する土谷岳令助教授(2000年7月21日).

写真4. 公開講座『飯梨川流域の自然と歴史』で講演する徳岡隆夫教授(2000年12月6日).

ンター長・國井秀伸助教授・石田秀樹生物資源科学部講師による「飯梨川流域の地質と自然」，竹広文明助手による「たたら製鉄と飯梨川」，徳岡隆夫総合理工学部教授による「飯梨川の利水・治水と河口のマッドランプ」など，7名の講師が講演した．

11月　News Letter №13発行．

12月1日　荒木　悟氏が汽水域研究センター非常勤研究員として着任．(News Letter №14に記事)

2001年(平成13年)

1月10日　第8回汽水域研究・山陰地域研究発表会

　延べ38名の発表者により14題の研究が発表された．

2月3日　第7回鳥取大学・島根大学合同シンポジウム「山陰地方の現状と課題―鳥取県西部地震とくらし―」(鳥取大学医学部にて)に参加．

3月6日　しまね産学交流会(島根大学にて)に参加．

3月17日　徳岡隆夫前センター長が最終講義「フィールドワークに魅されて―四万十，ヒマラヤから汽水域まで―」をおこなわれる．(News Letter №14に記事)

3月21日　第43回汽水域研究懇談会

　長崎大学教育学部教授・東　幹夫氏が「諫早はいま・・・」と題して話題提供．

4月　News Letter №14発行．

写真5．第8回汽水域研究・山陰地域研究発表会で発表する高安克己センター長
(2001年1月10日)．

写真6．第8回汽水域研究・山陰地域研究発表会で発表する國井秀伸助教授(2001年1月10日)．

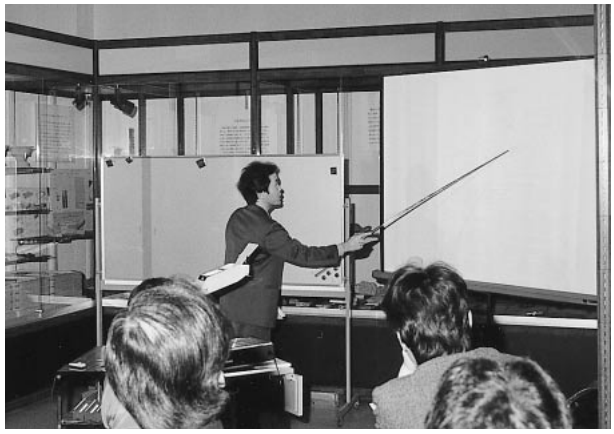

写真7．第8回汽水域研究・山陰地域研究発表会で発表する竹広文明助手(2001年1月10日)．

科学研究費の交付

平成12年度科学研究費補助金

基盤研究(B)大学間協力研究「ヒマラヤ形成と地球環境変化―ヒマラヤ研究所設立にむけての協力研究」(継続，研究代表者; 高安克已)
基盤研究(B)「汽水域における水生絶滅危惧植物の保全と修復」(新規，研究代表者; 國井秀伸)

地方公共団体,民間企業等との受託研究および共同研究

2000(平成12)年度

(共同研究)
㈱海洋生物栽培センター「ヤマトシジミの高密度畜養技術の開発」(研究担当者; 高安克已)

(受託研究)
建設省中国地方建設局出雲工事事務所「中海米子湾の彦名処理地における水生動植物相のモニタリング及び保全に関する調査研究」(受託者;國井秀伸)

(その他)
㈶ホシザキグリーン財団「宍道湖・中海周辺の水域における水生絶滅危惧植物の継続調査」(研究担当者; 國井秀伸)
島根県教育委員会等「島根県内遺跡発掘調査の調査指導」(研究担当者; 高安克已，竹広文明)
島根県古代文化センター「風土記調査」(研究担当者; 高安克已)
宍道町「宍道町史編纂事業」(研究担当者; 高安克已)
米子市「米子市史編纂事業」(研究担当者; 竹広文明)

編集後記

今年度も本誌を無事に発行することができました．当初は原稿の集まりが悪く，背表紙ができないのではないかと危惧していたのですが，その後徳岡隆夫前センター長から複数の投稿があり，何とか例年並の体裁を整える事ができた次第です．ご存知のように，汽水域研究センターは平成13年度をもって時限となり，次年度からは新たなセンターとして再出発することになります．本誌は次の9号まではこれまでと同様に発行する予定ですが，その後をどのようにするか，その内容，発行形態や体制などについて，これから本格的に議論していきたいと思っております．いずれ皆様のご意見を集約する機会を設ける予定ですので，ご協力のほどお願い致します．